



営農NEWS



雑草イネが発生した水田における除草体系

早い発見と迅速な対策が重要になります

近年、県内の水田で、雑草のヒエなどとは違うが、栽培イネともちょっと特徴が異なる「雑草イネ」（栽培イネと同じ植物種ですが、古代米などとは異なります）が広がりがつあります。これまでは、一部の地域で問題となっていました。その後、国内の各地へ徐々に拡大をみせ、本県でも水田での発生や収穫物への混入がみられています。

この「雑草イネ」は、出穂後、極めてモミがこぼれて落ちやすく、独自に交雑を繰り返して、水田環境に適応してきた雑草です。このため、多発生してしまうと、「初中期一発剤」の単独処理では除草効果が不十分となってしまう、多種の体系処理や手取り除草など総合防除が必要となります。

現在、これら雑草イネが発生して問題となっている水田での対策技術を、平成 29 年度 茨城県「農作物雑草防除指針」などから抜粋して紹介します。

<雑草イネ発生の問題点>

- 1 発生の発見が遅れて放置すると、3~4 年で多発生状況になり、減収被害を招いてしまった事例があります。
- 2 農産物検査で、雑草イネの玄米が混じっていれば、着色粒として扱われ、混入率が 0.1% を上回ると 2 等に格下げられます。また、異品種混入とみなされて、品種銘柄表示ができなくなります。
- 3 対策を怠り、農業機械を介して拡散すると、地域全体の水稻生産に大きな被害をもたらします。
- 4 混入した玄米を色彩選別機で取り除ける雑草イネもありますが、(収穫前のモミの脱粒で、種子が水田に落ち) 水田から雑草イネが減るわけではありません。

<主要な除草体系>

- 1 侵入初期の極少発生の場合は、**モミが脱粒する前（出穂後 2 週間以内）に株ごと抜き取り、圃場外に持ち出して適切に処分**します。

- 2 既に圃場にまん延してしまった場合は、以下を参考に、**継続的に 3 年程度の除草体系**が必要になります。

- 1) 雑草イネの出芽が揃う 5 月下旬以降に代かきを行い、物理的に枯殺させてから遅植えにします。
- 2) 通常の田植では、移植当日~翌日に**初期剤**を処理し、その後、7~10 日おきに**一発処理剤**および**中期剤**を処理する**3 剤除草体系が有効**で、薬剤の切れ目をなくして遅発個体を枯殺します。

なお、本県で、雑草イネへの効果が実証されている除草剤の組み合わせ事例として

(平成 29 年 4 月 6 日現在)

事例	[初期剤]		[一発処理剤]		[中期剤]
A	ソルネット 1 キロ粒剤 (移植当日処理)	+	ボデーガード 1 キロ粒剤 (移植後 7 日処理)	+	ナイスミドル 1 キロ粒剤 (移植後 14 日処理)
B	アルハーブフロアブル (移植当日処理)	+	マキシ-MX 1 キロ粒剤 (移植後 8 日処理)	+	ナイスミドル 1 キロ粒剤 (移植後 15 日処理)

※ 雑草イネの農薬登録上の適用草種は「水田一年生雑草」ですが、**雑草イネに有効な使用時期は「雑草イネ発生前まで」**なので注意してください。

※ これら以外の有効な除草剤については、日本植物調節剤研究協会のホームページ（技術情報の項）を参照するか、各農業改良普及センター（農林事務所・経営普及部門）または農業総合センターに問い合わせてください。

- 3) 上記 1)、2) の対策を行っても取りこぼした雑草イネは、脱粒が始まる前（出穂後 2 週間以内）までに手取り除草を行って、出来るだけ駆除します。
- 4) 既に発生を確認している雑草イネと比較して、稈長や出穂期に差がある栽培品種を作付しておく、区別が容易にできて、抜き取りが比較的効率になります。
- 5) 水稻の収穫後は、秋の耕起を行わず、「雑草イネ」の種子を表層にとどめて越冬させると、低温による死滅や鳥による摂食の効果が期待できます（ただし、縞葉枯病が発生している圃場では、防除対策として、ヒコバエの早期な耕起が必要になります）。
- 6) ダイズやソバ等の作物に転換し、耕起や攪拌による物理的な枯殺、イネ科雑草に効果のある除草剤の処理を行うことにより、雑草イネの発生が抑制されます。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※ JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040